

調査報告書

1. 概要

視察先：香川県三豊市立高瀬中学校（〒767-0011 香川県三豊市高瀬町下勝間2 7 2 5－1）

視察日時：2025 年 1 月 21 日（火）16 時～18 時

視察者：岩永きりん（板橋区議会議員）、西崎ふうか（豊島区議会議員）、細貝悠（目黒区議会議員）

文書作成者：岩永きりん

2. 要旨

香川県三豊市立高瀬中学校は、2022 年 4 月 14 日に夜間学級を開設し、義務教育を十分に受けられなかった方々や外国籍の方々に学びの場を提供している。特筆すべきは、文部科学省から「不登校特例校」の指定を受け、全国初の夜間中学として学齢期の生徒の受け入れを開始した点である。この取り組みは、起立性調節障害などで昼間の通学が困難な生徒に新たな学びの場を提供し、多様な世代が共に学ぶ環境を創出している。視察では、学齢期の生徒が高齢の同級生等と共に学び、社会性を育む姿が確認され、夜間中学の新たな可能性を実感した。また、卒業後の進路支援として、専門学校との連携や職業体験を通じて、生徒の将来の選択肢を広げる取り組みも行われていることが分かった。これらの実践は、板橋区における不登校生徒支援の参考となると考えられる。

3. 調査の背景

・近年、不登校児童・生徒や外国籍住民が全国的に増加している中、学齢期の生徒に加え、過去に学校教育を十分に受けることができなかった成人や外国籍住民の学習機会の確保が求められている。こうした状況の中、全国的に夜間中学の設置が進められ、東京都内でも新たな開設が検討されている。

・香川県三豊市の高瀬中学校は、全国で初めて「不登校特例校」として夜間中学を開設し、従来の夜間中学の枠組みを超えて学齢期の生徒も受け入れている。このモデルは、不登校生徒の学び直しだけでなく、多世代が共に学ぶ場としての可能性を示しており、板橋区における教育施策の参考とすべく視察を実施した。

4. 調査の目的

本視察の目的は、主に以下の 3 点である。

（1）夜間中学の実態調査

- 高瀬中学校における夜間学級のカリキュラム、運営体制、対象生徒の特性などを調査し、板橋区での導入可能性について考察する。

(2) 学齢期の生徒受け入れの課題と工夫の調査

- 高瀬中学校の「不登校特例校」としての役割を分析し、板橋区における不登校生徒支援の新たな選択肢を探る。

(3) 地域との連携・進路支援のあり方の調査

- 夜間中学卒業後の進路支援の仕組み（専門学校や職業訓練機関との連携など）を学び、板橋区での応用可能性について考察する。

5. 調査結果の詳細

高瀬中学校校長先生、三豊市教育委員会事務局 学校教育課によるご説明をお聞きし、質疑応答を行なったのち、授業・校舎を見学した。

(1) 高瀬中学校校長先生、三豊市教育委員会事務局学校教育課によるご説明

- 配布資料に添い、三豊市公立中学校夜間学級設置基本方針や設置の経緯についてご説明いただいた。
- 配布資料
 - ・ 三豊市公立中学校夜間学級設置基本方針
 - ・ 三豊市における公立夜間中学について（三豊市教育委員会事務局 学校教育課）
 - ・ ようこそ三豊市へ
 - ・ 令和6年度行政資料（香川県三豊市議会）

(2) 質疑応答、校長先生による資料の補足説明

質問内容等	回答
高瀬中学校の概要について	校区に2高校、5小学校、2園がある。昼間部は1年：116名、2年：108名、3年：110名、合計12学級（特別支援学級含む）。
校長先生は夜間学級を設置して良かったとお考えか	設置して良かったと考えている。「夜間学校」だから実施できることが多くある。特に学齢期の子どもたちにとって貴重な居場所となっている。
コース別学習とした理由は何か	1年目、2年目は学年ごとに授業を行なっていたが、到達度に大きな差があったためコース別学習を実施することとした。
日本語コースとはどのようなものか	毎日一時間取り出しで日本語を学ぶコースである。
在校生の進路希望はどのような	3年生10名中、 ・卒業希望：7名

状況か。	→内訳は進学 3 名（うち全日制 1 名）、就職 1 名（外国籍の生徒）、進学就職希望なし 3 名 ・原級留置：2 名 ・休学 1 名
コース別学習について、来年度以降はどのように実施するのか。	現在の「のびのびコース」「ぐんぐんコース」「いきいきコース」について、学齢期の生徒と経過者の生徒でそれぞれクラスを分けることを考えている。学齢期の生徒と経過者の生徒を一緒に指導するのはさまざまな点で難しい面がある。
学齢期の生徒も対象にしていることに対しての校長先生の所感を伺う。	・中学 1 年生が 21 時まで勉強するような状況になっていることについては、どうなのかという思いもある。本来は 15 時～19 時 30 分くらいまでがよいのではないかな。ただ、夜間であることで保護者が連れて来られる、という面もあるので難しい。保護者が連れて来られる、というのは不登校生徒が学校に来る点でミソとなる部分である。 ・また、大人と学齢期の子どもが全時間ともに学ぶことに関しては無理がある部分もある。例えば、[REDACTED]など、トラブルもある。 ・[REDACTED] [REDACTED] [REDACTED] [REDACTED] 大人の生徒は「話を聞いてほしい」という思いを持っている方も多く、その証拠にカウンセラーの予約もすぐ埋まる。その結果、学齢期の生徒に時間を割くことが難しくなる場合がある。 ・それらのことから、出来れば「学齢期の生徒」「大人の生徒」が全時間帯一緒に学ぶのではなく、一部は時間帯を分けられると良いと感じている。（岩永補足：例えば、15 時～17 時は学齢期の生徒のみの授業、17 時～19 時は双方、19 時～21 時は大人の生徒のみ、というようなイメージ）
連携している専門学校、高校に	・四国医療専門学校 →「お仕事体験セミナー」の実施

はどのような場所があるか。またどのような連携をおこなっているか。	・サポートステーション →自分に合った職業は何か？と考えるワーク、職業支援（例：遊園地の清掃作業）など ・多渡津高校（定時制） →学校の訪問、授業見学
夜間学級に校則はあるか。	校則は特に設けていない。
教員配置はどのようになっているのか。また、課題はなにか。	・校長は昼と夜両方で1人。兼任している状態である。仕事は2倍。 ・教頭は本来昼間部のみで2人配置されるところ、現在昼間部が1名、夜間部が1名となっている。夜間に関しては、12時30分から21時まで勤務することになっている。 ・校長、教頭含む正規教員は県費配置。そのほか、SSW、支援員の通訳、個別の学習指導サポート員は市費配置。 ・夜間学級開設により、学級数としては各学年1学級×3学年＝3学級の増となり、それに応じて3人の正規教員と3人の時間講師が配置された。しかし実態は別の学校が1校増えたような状態であり、教員が足りていない。 ・教員の配置はとても重要で、県に対して様々な要望も行なったものの、法律の問題で出来ないと言われたことも多い。 ・年間授業時間については、学びの多様化学校：800時間/年、夜間学級：700時間/年という決まりがある。（100時間のずれがある） ・現状は3クラスだが、来年度は「学びの多様化」部門（学齢期の生徒が対象）を3クラス、「夜間学級」部門（学齢期を過ぎた生徒が対象）を3クラスとしたい。6クラスとすることで、正規教員が6名配置される。なんとか来年のうちにそういった体制にしたい。また、学齢期の生徒と80代の生徒では学ぶ内容も異なるので、学齢期の生徒と成人の生徒ではコースを分けるべきだと感じている。 ・学齢期の生徒が増えており、他の自治体から来る場合も多い。そういった現状から、「ここには2つの学校（昼間学校と夜間学校）がある」ということにしないと成立

	しないと考えている。 ・高瀬中学校の場合、「高瀬中学校の夜間学級」として開設した。(例：1組～4組が昼間部、5組が夜間部、というような扱い) そうすることで立ち上げは早かったが、教員の配置の面で課題が多い。定員法などにより、増やせる教員の人数に限りがある。実態は2つの学校が建物だけ共有している状態。2年間で、設置準備室も作らず開設した。着任当初は感動したが、実態としては、現場の教員の工夫と忍耐によってなんとか学校運営している状態。持続可能ではないと考えている。 ・主要5教科以外は、非常勤の先生が担当している。
昼間部と夜間部の交流はあるのか。	交流はない。
夜間学級が設置されたことで、昼間部への影響はあるか。	施設面でマイナスがある。5教室を昼間部から夜間部に渡したことになる。一部教室は共用する予定だったが、実際は難しかった。
補助金等の活用はどのような状態か。	・開設から3年間、国庫補助金が活用できる。(R3：144万円、R4：250万円、R5：250万円) ・R7からは、他市町村の生徒受け入れの場合年間6万円/人の補助がある(R6までは4万/人だった?)
開設後の協議会の実施状況は。	年2回協議会を実施している。
高瀬中の昼間部に所属している生徒が夜間部への通学を希望することはあるのか。	現在のところそのような希望はない。

(3) 授業・校舎の見学

- 「のびのびコース」「ぐんぐんコース」「いきいきコース」の各クラスの授業の見学を行った。当日は欠席者が多かったとのことだが、経過者の生徒、学齢期の生徒、外国籍の生徒が同じ教室で学んでいる姿を拝見した。
- 「のびのびコース」にて、経過者の生徒が理科の授業で静電気の実験を行って

おり、静電気の働きに驚いている様子を拝見した。

- 日本語（コースは不明）の授業を行っている教室では、外国籍（中国籍）の生徒が熱心に授業を受ける様子を拝見した。
- 「いきいきコース」では、学齢期の生徒が英語の授業の準備をしている様子拝見した。
- どのコースにおいても、生徒の数に比べて先生やスタッフの数が多く、手厚い指導の様子が見受けられた。
- また、教室外には生徒による美術作品が展示されていた。

6. 考察

香川県三豊市立高瀬中学校の夜間学級は、全国初の「不登校特例校」として、従来の夜間中学の枠組みを超えた先進的な取り組みである。不登校児童・生徒や、義務教育を十分に受けられなかった成人・外国籍の方々に対し、共に学び合う場を提供するという意義は大きく、多様な背景を持つ人々が「学び直し」を通じて社会との接点を得る機会となっている点は高く評価できる。

特に注目すべきは、学齢期の生徒が高齢者や外国籍の生徒と共に学ぶ姿が見られたことにより、「夜間中学＝中高年の再学習の場」という固定観念を超える新たなモデルが構築されている点である。こうした多世代・多国籍の学びの場は、社会性の涵養や相互理解の促進にも寄与しており、教育の新しい形を体現している。

一方で、運営上の課題も非常に多く浮き彫りとなった。特に教員配置の困難さや、学齢期と成人の生徒を同一空間で指導することの限界、夜間帯の通学による心身への影響などは、今後の制度設計において慎重な検討を要する点である。現場では、校長先生・教頭先生をはじめとする教職員の努力と創意工夫によって運営が成り立っているが、制度としての持続可能性には課題が残る。特に、「実質的に2つの学校が1つの建物を共有している状態」との指摘は、他自治体での導入検討時においても重要な示唆となる。

また、卒業後の進路支援として、地域の専門学校や支援機関との連携が図られている点は、進学や就職といった次のステップに向けた支援のあり方として参考になる。特に、不登校経験のある生徒が社会との接点を持ち直すうえで、教育機関と職業支援の接続は極めて重要である。

板橋区においても、不登校児童・生徒や外国籍住民の増加を踏まえ、学齢期から成人まで幅広い層を対象とした「もう一つの学びの場」の必要性は高まっている。高瀬中学校の取り組みは、こうしたニーズに応えるヒントを多く含んでおり、特に以下の3点が今後の施策検討の際に重要となると考える。

1. 対象生徒の特性に応じた柔軟なクラス編成・時間割設計
2. 行政・教育委員会・地域団体との継続的な連携体制の構築
3. 教員配置や制度設計の持続可能性を見据えた運営モデルの構築

今後、板橋区においても夜間学級等の学び直し支援策を検討する際には、高瀬中学校の事例を一つの実践モデルとして、課題と可能性の両面を踏まえた施策立案が求められる。